

長崎原爆遺構を歩く

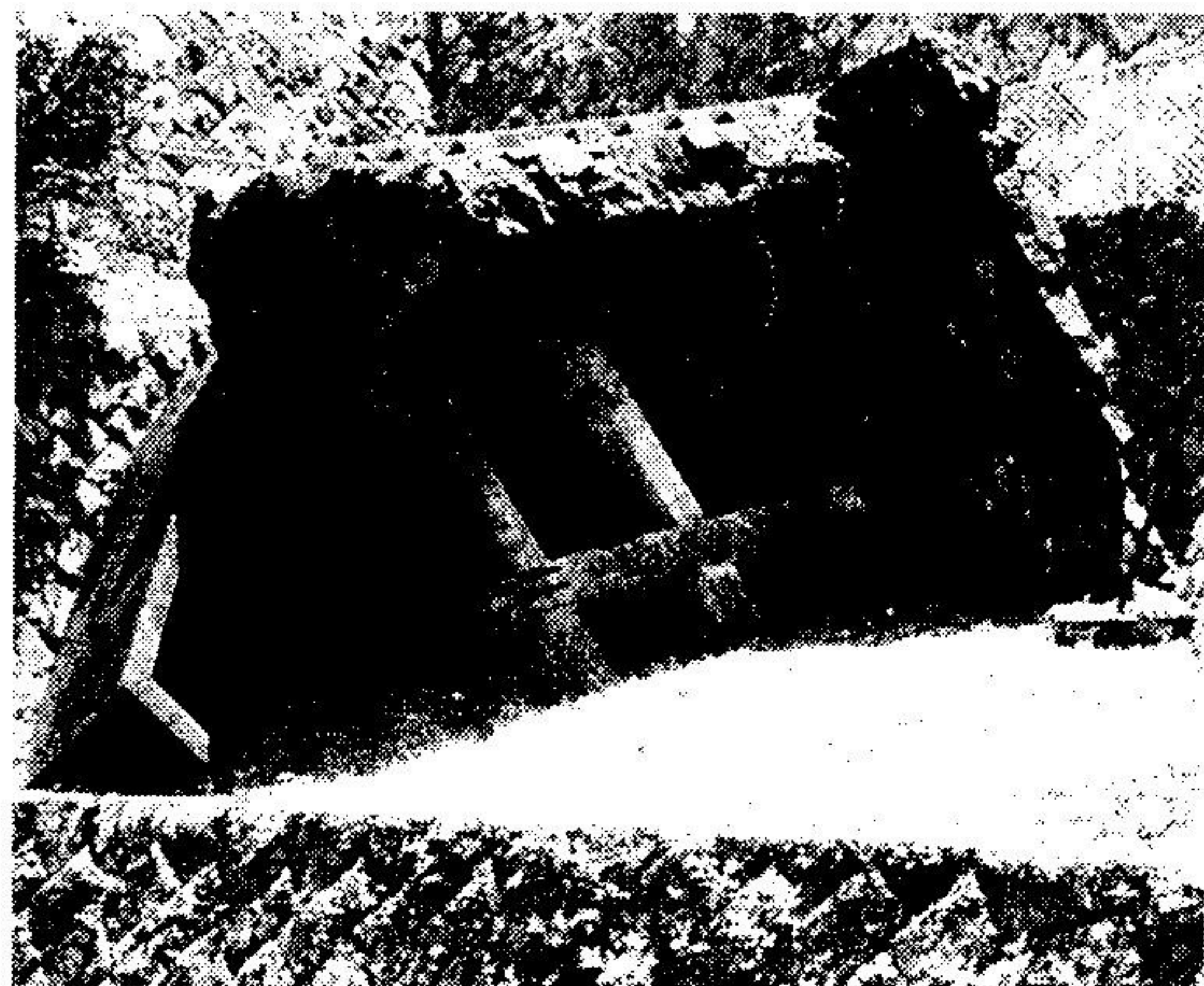
県原水協常任理事 内田 武志

旧天主堂は、浦上四番で選ばれました。

崩れ（一八六八年の切支丹弾圧）で追放された信徒たちが、禁教令廃止後に荒れ野となった村に帰り、貧しい暮らしの中で、勤労奉仕と献金で三十年をかけ建設されました。

この場所は、かつて「踏み絵」が行われた旧庄屋内、八千五百人が被爆死したといわれます。よくざい）の意味を含め

天主堂の小聖堂には瓦



爆風で吹き飛んだ鐘楼ドーム

落下した鐘楼ドーム

②

礫（がれき）の中から掘り起こされた、焼け跡の残る顔のみの被爆マリア像が祀（まつ）られ、壁には被爆犠牲信徒の氏名が銘板に刻まれています。

戦後、広島原爆ドームに匹敵する長崎を代表する被爆遺構として永久保存を求める声は高かったのですが、破壊がすさまじく困難などの理由で全面撤去され歴史的遺跡は失われました（一部が爆心地公園に移築されています）。

しかし、新たな天主堂正面には鼻や指がかけたマリア像やヨハネ像、敷地内の庭園には黒く焦げ跡を残し頭部さえ欠いた聖像、天使像などがあります。

また、直径五・五メートル、重さ約五十トという鐘楼ドームが北側の川に転落しており、今も貴重な資料として、その場所に保存・公開されています。

（つづく）